江戸より移つて來た士族はカッパと呼ぶと。ドンガスは泥龜を訛つたのか。

（大正四年鄉研第二卷第十號）

生駒山の天狗の話

昨夜奇異の事を聞く長島金三郎と云ふ元大和都山の藩士、當地に來り花と茶を敎へ又金魚屋を營み居る。五十五歲なり。此人云ふ、十四の時生駒山に預けられ寺に居る。例年四月一日には大法會あり、護摩を修し士女麕集す。此年年前鬼の和尙さんとて五十餘歲で眼深く仙人顏なる和尙、每夜此寺へ茶話に來ることあり。洞川の寺から夕食を濟ませて後高下駄を履き來り、十時過頃迄話して又洞川へとて去る（洞川は生駒山より十何里あるか知らず、兎に角遠方なり吉野郡天川村大字洞川）。或時寺の小僧等此和尙に向ひ、法會の時天狗を連れ來り見せよと言ひしに連れ來る。尋常七八歲の子供數人にて、松の樹の上に遊び居る、是れ天狗なりと云ふ。子供の天狗は面白からず、大人の天狗を連れ來りと云へば、それは難事なり、然し試むべしと云ふ。其翌年卽ち長島生駒山に居りし年の法會に彼和尙一人來る。貴僧は約束を忘れ天狗を連れ來らざりしことよと云ふに、連れ來りてそこに有るではないかと護摩壇を指す。其方を見るに何も無し。何も無しと言へば成程汝等に見えぬは尤も也とて、和尙自分の衣の袖をかざしてそれを隔てゝ見せしむ長島等其袖を透して見るに、護摩壇の邊に天狗充盈す。儘かには覺えねど（熊楠曰く、幽靈始めかゝる鬼形の物は皆見ても儘かに覺えるを得ず）、頭は坊主で男女ありしやうなり。衣袈裟等尋常の僧に異ならぬ者多く、中には鼻至つて高きあり、其鼻は上の方へ又は下の方へ鉤りてあり。其常人と異ならざる者も、和尙の袖を透さずに見れば一向見えぬにて天狗なることを知りしと云ふ。

（大正四年鄉研第二卷第十二號）

熊野の天狗談に就て

田村君の天狗の話（鄉研三卷一八三頁）を讀んで居る處へ、新宮生れで京牟婁南牟婁兩郡の珍